2020年１月発行

自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。（レビ記 19-18）
人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。（マタイ 7-12）

41

ひびきあい
HibikiAi
聖ヨハネ学園だより

発行：聖ヨハネ学園 〒569-1032 高槻市宮之川原2-9-1 TEL&FAX072-687-0548

創立130周年記念の諸行事を終えて

聖ヨハネ学園
理事長
野知　卓司

創立１３０周年を迎えたこの年、10月に記念公開講座と記念法人セミナーを、11月には記念感謝礼拝と記念法人交流会を行いました。又、養護施設聖ヨハネ学園では恒例の「丘のまつり」を穏やかな晴天の11月23日に記念祭として終えることができました。

この長い歴史の中で培われ養われてきた伝統と信頼と信用という基盤の上に、今私たちが福祉事業を展開できていることをこれらの行事を通して改めてかみしめています。

法人交流会の開会挨拶でも触れましたが、この１３０年間を大きく３つの期間に分けることができると思います。第１期は１８８９年貧院としての出発から太平洋戦争末期の１９４４年に高槻市に移転するまでの55年間です。大阪市東区石町で２人の女児の養育を始めて、場所を移し名前を改称しながら次第に組織化され児童養育事業として専門化し、確固としたものとなってゆく期間です。

第２期は１９４４年戦火を避けて高槻市服部に移転して、敗戦後の混乱した苦難の時代を戦災孤児収容所から児童養護施設として、１３０００坪の広大な山林の中で必要な建物を建て運動場を作り、児童福祉法の下で安定してゆく26年間です。昭和40年代には周囲の宅地化が急速に進み、所有地の65％を売却してその後の運営資金を蓄えています。

第３期は１９７１年の下田部保育園の開設を端緒として、１９７５年エンゼル幼児園、１９７６年聖ヨハネ児童養育センター、１９８１年特養ミス・ブール記念ホームと次々に開設し、高槻市から「ゆうあいセンターの事業運営」「乳幼児療育事業めばえ教室」「うの花療育園指定管理」を受託し、２００７年の「地域生活支援センター光」、２０１１年の「聖ヨハネ子どもセンター」、２０１２年の「地域密着型ミス・ブール小規模特養」開設と続いて現在に至る49年間です。

こうして障がい者を含めて幼児から高齢者までの多様な人々が利用する、総合的な社会福祉事業体として活動する現在の姿となっています。この歴史の中でその時々に次の目標を掲げそれを実現してきた先人たちを模範として、今を生きる我々も中長期ビジョンを持ち、その実現のために毎年の目標を掲げて活動しております。その中核に位置付けているのが「将来総合整備計画の基本構想作り」です。

このために１月から７月まで15人の主任全員参加で「いのちかがやくＰＪ」を行い、「１８８９年からの軌跡を訪ね、多様な人々の出会いと笑顔の場から、新たな価値を作り出す」というビジョンが提案されました。

これを創立１３０周年という節目の時にあたって、次なる歴史へ踏み出してゆく確固たる展望としたいと願っています。

法人創立130周年
記念感謝礼拝

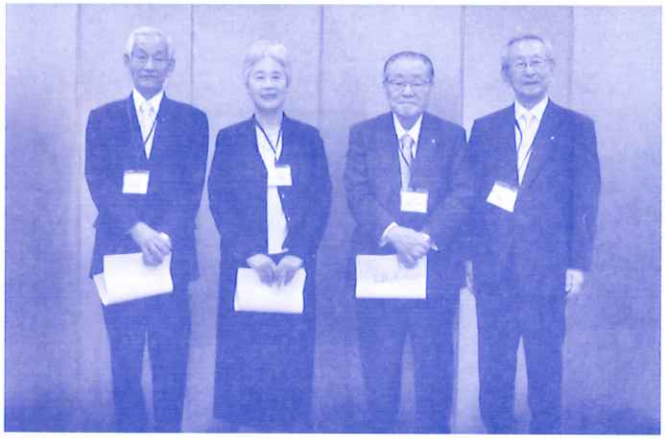
2019年11月16日(土)午後1時より、大阪聖ヨハネ教会礼拝堂にて記念感謝礼拝が開催され、約80名の方にご参加いただきました。

法人創立130周年
第29回法人交流会

2019年11月16日午後6時30分よりホテルグランヴィア大阪にて、法人交流会が行われました。参加者は来賓、役員の方38名、法人職員65名、計103名となりました。

今回は3部形式での開催となり、第1部法人創立130周年セレモニー、第2部交流会、第3部表彰式という形で進行されました。

第1部セレモニーでは野知理事長、磯主教様よりご挨拶いただいた後、役員、評議員を30年以上にわたってご奉仕いただいた東様、井上様、薮内様の3名の方への感謝状贈呈式が行われました。



第2部交流会では、各テーブルでのお食事、歓談が始まり、テーブルごとに自己紹介しながら交流が広がっていきました。抽選会も始まり、各景品をめぐって盛り上がりを見せていました。

第3部表彰式では、定年・永年勤続者の表彰と表彰者のご挨拶があり、今まで勤務されてきた様々な思いを話されました。

今回は記念交流会として、その長い歴史に思いをはせながらの会となりました。和やかな雰囲気の中、おいしいお料理をいただきながら、様々な交流が生まれる場として、楽しいひと時を過ごすことができました。

聖ヨハネ学園創立130周年記念　法人セミナー講話

「学園　歴史の担い手
～古田誠一郎園長物語」その①

司祭
ペテロ竹林徑一

社会福祉法人聖ヨハネ学園の130年の歴史を振り返った時、忘れられない人々、忘れてはならない人物が、節目ごとに立って、屋台骨の役割を果たしているのが見えてきます。

特に昭和時代の前半、日本が戦時体制を強化、第2次世界大戦に突入し敗戦した辛苦の時代、そして戦後処理という大変な時期に、19年にわたって聖ヨハネ学園の園長、常務理事をされた古田誠一郎(ふるた　せいいちろう)というユニークな指導者がおられました。

この古田さんの人物像・足跡を追いながら、学園について発見・学びをしてみましょう。

古田誠一郎は、1897(明治30)年に和歌山市の繁華街、ぶらくり丁の著名な小間物と貴金属店を営む古田家の長男として誕生しました。父親の吉兵衛は、幼ない頃から息子に師匠について茶の湯と狂言を学ばせ、身に付けさせることに熱心でした。そしてそれは人柄・才能の素地となり、後年の彼を形成したようです。

和歌山商業学校を卒業、東京の近衛歩兵第4連隊で2年間兵役に服し除隊後、和歌山でぶらぶらしている時、友人から借りた本の中に聖書があったらしく、拾い読みするうちに、心を惹かれ、「自分自身が未知の世界に踏み入って、新しい光を仰ぎ見るような心持になった」と、書いています。

これをきっかけに、近所の日本聖公会・和歌山聖救主教会へ通うようになり(大正8年)、永田保羅執事の指導を受けて、キリスト教の教えに理解を深め、信仰を持つに至りました。

併せて、「聖書の内容と、子供時代に熱心に読んだ巌谷小波のお伽噺の世界との関連にも異常な興味を覚えて、教会の子供達に語って聞かせ、親しくなった。」「日曜学校の教師に委嘱され大いに歓ぶ。この感激が、児童問題に生涯没頭する端緒となったように思う。」とも言っています。

〔遺稿集「私の体験談～あなたまかせの人生(1)」より〕

2年の求道後、1921(大正10)年10月16日に牧師のロイド長老(今の司祭)から洗礼を受け、パウロという教名を授けられました。続いて、11月6日に、タッカー監督(今の主教)から信徒按手にあずかりました。

洗礼を受ける時、後見人として3人の教父母を立てますが、その中の一人、西田一子さんは看護婦で、教会の青年会の仲間でした。彼女は明治26年生まれで、彼よりも少し早く、1919(大正8)年7月にロイド師から受洗、大正9年5月にタッカー師より受按していました。つまり、彼女は古田青年よりも信仰の上で先輩であり、共に青年活動をしていたと考えられ、後に結婚をする(年月不明)ことになります。しかも、彼女は後に園母として、また聖ヨハネ学園評議員として夫を支え、大事な働きをしています。

ちなみに、1950年作成の聖ヨハネ学園職員リストの中に、古田節子(1929・昭和4年生まれ、聖泉高女卒)という21歳の女性がいます。古田夫妻の娘ではないかと思います。

私は、この和歌山聖救主教会での求道・受洗の出来事と、日曜学校教師等の諸活動に出会い、熱中・没頭した20代前半の経験が、古田誠一郎の95年の人生の方向を決め、本人も自覚しないところで神様がひそかに使命・グランドデザインをお与えになったのではないかと思っています。

ところがキリスト者になって間もなく、誠一郎は父親に呼ばれ、入信を問い詰められて切腹を求められます。昔、耶蘇教に帰依した先祖の茶人古田伊織が、二条城で切腹したことをあげ、「お前のように切腹も出来ぬ恥知らずは、家に置けぬ。直ぐ出て行け」と勘当・廃嫡され、神戸へ逃げ去るのです。1921(大正10)年11月初め、24歳でした。

先輩らの奨める就職先を辞退して、下山手通7丁目の三角形

の2階建て借家(家賃11円20銭)で、ハイカラぶって「ポテトベーカリー」と暖簾を掲げ、焼芋屋を開店します。焼芋屋ならば、子供が集まり易いし、店でお伽噺会などを開催し、毎日多くの児童に触れる喜びを何よりも優先したのです。その子らを、主日に日本聖公会神戸聖ミカエル教会(当時、竹内宗六牧師)の日曜学校へ誘い導き、日曜学校教師としても活躍を始めます。

教会で知り合った英国人宣教師F・B・ウォーカー師は、神戸在住外国人の国際学校の校長で、ボーイスカウト運動を始めたあのベーデン・パウエル卿とも面識のある人でした。英会話を学ぼうと出かけて行った古田は、そこで在神外国人子弟のためのEMSボーイスカウト隊の活動に出会うのです。多分直感的に、自分がイメージを持っていたやりたいことは　これだと認識し、急速にのめり込んでいったのだと想像されます。

竹内牧師の理解・支援をもとに、仲間の足立勤(後のNHK大阪放送局が開設した「子どもの時間」の初代主任)・平井哲夫等と語らい、時の神戸市社会課長・木村義吉氏の援助も得て、1921(大正10)年12月1日、教会を母体に神戸ボーイスカウト山手隊を創設しました。日本では東京の弥栄BSと並んで、最も早期に発足した隊でした。時間的に考えると、神戸への移住から、和歌山の生家を追われてから僅か約1ヶ月という期間での、この行動力には全く驚かされます。

☆時代状況の補足説明＝1907(明治40)年英国のベーデン・パウエル卿(B-P)が起こした実験キャンプからボーイスカウト運動は、欧州・米加各国に急速に広まり、日本へも乃木希典大将らが早くも着目し、実践に着手している。古田の師となる久留島武彦は、早くも1911(明治44)年に、子供の雑誌にボーイスカウトを紹介し、基礎作りを始めている。

B-Pは1912(明治45)年4月に日本を訪問している。優れた青少年教育法として、少年団、少年義勇団という形で普及し、スカウト運動の素地を作って行った。少年事業や近代スポーツの導入が始まっていたYMCAでは、グリーソン主事が1912(大正1)年に北米からBS指導書を持ち帰り、研究を開始した。

日本で初めての少年中心のキャンプは、大阪YMCAの少年部(または少年義勇団)が、六甲山麓、西宮の南郷山の松林で行なった夏期天幕生活とされている。1920(大正9)年8月7～21日、増田健三主事を中心に、独立自営の精神養成をテーマに展開した。

なお、日本聖公会では「基督教週報」誌によれば、昭和2年の中尾鐵三氏による「米国に於けるキャンプ生活」の連載記事、青年会夏期テント生活参加者募集、少年少女夏期学校、日曜学校教師養成プログラムなどの情報が、大正末・昭和初期から急増する。

日本でも都市化、工業化が急速に進み、また自由教育思想・実践の新展開など、社会の大きな変化への反応、動きが反映していることも考慮すべきであろう。

1923(大正12)年9月1日、関東大震災が発生しました。古田は壊滅的大損害との号外を読み、焼野原をさまよう子供たちの姿を思い浮かべ、矢も楯もたまらず、足立勤と共にスカウト運動の後援者・河西兵善衛に相談しに行きました。その賛同と援助を受けて直ちに3000人分の袋菓子を用意して、スカウト姿でその日の豊岡丸に乗船し、東京を目指し6日に着岸しています。東京では、三島通陽子爵(スカウト運動の理解推進者)を訪ね、支援と指示を仰いで、弥栄BSと共に、上野公園などで子供達に菓子を配布し、震災ボランティアの任務を果たしました。行動派古田の面目躍如です。

その後ある日突然、神戸市長・石橋為之助が来宅し、須磨に大邸宅を提供するから、財界人や地域の年少の子弟にBS方式の指導訓練を受けてほしいとの依頼の申し出を受けたのですが、古田は焼芋屋を続けたいとの思いが強く、返答を保留します。しかし申し出に対する研究調査を経て、ボーイ年齢以下の年少者の隊、「須磨向上会ウルフ・カブ隊」を創設し、1923(大正12)年12月、日本初のカブ・スカウトを発足するに至ります。

また同年、活動写真(映画)を教育に活用したいとの願いを、賛同協力者を得て、「神戸映画教育会」を立ち上げました。今

で言うフィルム・ライブラリーの前身ともいえ、輸入物の劇映画や科学映画などを学校等で巡回上映やフィルムの貸し出しを行なったりしています。

とかくするうち、和歌山の生家から家運が傾いたので帰れとの父からの知らせがあり、神戸の仕事を仲間に託して、一旦帰省をすることになります。債権者への説明と事業の閉鎖などの整理作業を済ませ、見通しがやっとつきました。そして久しぶりに和歌山聖救主教会(牧師は八木善三郎師)にも里帰りし、多くの若者信徒と青年会【ロゴス会】を設立し、会誌「ロゴス」を発行したのも、同じ1924(大正13)年頃のことでした。西田一子さんとの再会、結婚がこの頃であったのかもしれません。

並行して、和歌山にはまだスカウト運動がなかったので、働きかけて和歌山第一健児【二個班】を発足させていますが、何事も行動が早い様子が伺えます。

この頃の聖ヨハネ学園に目をやると、1905(明治38)年に天王寺区細工谷町61に取得した1500坪の内、1000坪を聖バルナバ病院に売却した資金10万円で、近代的で本格的な児童養護、および幼児育成事業に着手しつつありました。1921(大正10)年には、福井県立感化院長だった針ヶ谷直文氏という専門家を園長に招き、福祉事業の新展開を始めています。

また学園創設者のリーラ・ブール女史は、老齢のため引退して帰米の準備をしている時、風邪を悪化させ、1924(大正13)年3月20日に大阪で78歳の生涯を終えています。

さて、実家の目途が立ったのを見て、古田は「人生出直し」という決意を固め、東京へ出て行きました。上京すると中古トラックを入手し、自分で運転しながら、震災復興資材のセメント・材木・煉瓦などの運搬活動を行ない、併せて日本大学専門部文科(夜間)に入学して教育倫理を学ぶのですが、後に外遊のため1929(昭和4)年に日大を中退しています。

このように、27歳前後で人生出直しを決意した古田の思いは本気であったらしく、しばらく足踏みした後に大きな転機が彼を待っていたようです。偉大な二人の指導者と出会い、その許で学び働く機会を得るのです。

最初の人物は「日本のアンデルセン」と呼ばれた児童文学者で、童謡「夕やけ小やけ」の作詞者であり、日本のボーイスカウト運動の基礎作りもした久留島武彦(1874~1960)ですが、いつ・どこで出会ったのかは不明です。しかし、口演童話運動やBS関連で既に接触があり、師と仰ぐ関係が生まれていたようです。上京・苦学している彼に「古田君、身体を壊しては駄目だ。俺の仕事を手伝え」との勧めを受けて、東京代々木の早蕨第二幼稚園に住居が与えられます。久留島の蔵書の整理・管理を命ぜられつつ、童話関係者が久留島を囲む勉強会「回字会」の世話・事務も任されました。会名の由来を師に問うと、「外なる口もさり乍ら、内なる口を大いに磨くべし」つまり、回の字は、口の中に口あり。口の外に口ある。話し方の技巧【外】の研究もさることながら、話の内容・心の問題・自らの教養【内】を高めることが一層大切だと諭された、と書いています。

また、モンテッソーリの幼児教育を教えられ、「規則に縛られない自由な保育」は古田の基本的な教育方針になっていきます。

第二の師は、海軍少将を55歳で退役後、日本のボーイスカウトにおける指導者の訓練体系を確立した「長老」、伯爵の佐野常羽(つねは)です。古田が神戸で日本初のBSを結成した翌年、1922(大正11)年に、佐野は栃木県佐野に「唐沢義勇少年団」を結成していますし、1924(大正13)年デンマークで第2回世界ジャンボリーが開催され参加(団長:三島通陽、副団長:久留島武彦)した後、BS国際会議の日本代表として参加し、さらにギルウェル指導者訓練所に日本人として初入所したキーパースンでした。

古田は上京中に古河電気系の工員教育スカウト団・日光精鋼所少年少女団の結成に参画します。そこで一緒に指導者をした中鉢常正(後の日本ゼオン社長)と共に、佐野常羽が1925(大正14)年に富士山麓山中湖畔大洞に開設した「少年団中央指導者実修所山中道場」(のちの山中野営場)に入所し、佐野の直接指導を受けることになり、やがて助手として所員も委嘱され、新展開していくのです。

自筆履歴書によれば、1927(昭和2)年4月に、文部省内少年団日本連盟指導者実習所の

専任所員になっています。
この1924(大正13)年の上京(28歳)後、1930(昭和5)年の聖ヨハネ学園園長就任の打診(33歳)までの約6年間、古田がどう行動していたのかは、殆ど資料を入手していないためコメント出来ないのですが、久留島武彦および佐野常羽という両巨人の許で働き、訓練を受けて、彼の後半生に向けて備えをしていた期間でもあると言えそうです。

（次号に続く）

感謝状を頂いて

この30年を振り返り

聖ヨハネ学園
理　事
東　敏勝

法人創立130周年記念に際し、このような感謝状を頂くと、私の様な者でも多少はお役にたったのかなと思え、嬉しく思っております。ありがとうございました。

この30年を振り返れば、社会福祉の世界は大きく変化した様に思います。その変化の一つが、昔銀行の窓口では、来客を呼ぶのに『さん』付けで呼んでいたのが、ある日『様』に変わり「東様」と呼ばれ戸惑いと共に背中がこそばゆい思いをしたのを思い出します。その後、病院や郵便局お役所、どこへ行っても窓口では『様』と呼ぶようになりました。この変化の流れは社会福祉の世界にも及び、入所者・利用者等と呼んでいたのが、『ご利用者』と呼ぶようになりました。この呼称の変化は心理的な面での影響が大きく、『さん』と呼んでいた時は『してあげる』との思いですが、『様』と呼ぶと『させてもらう』との思いが自然と現れてきます。皆様も一度、友達か同僚を「○○様」と呼んでみて下さい。そして、その時の気持ちの変化を感じてみて下さい。その人への対応が自然と丁寧になっていませんか？

2008年に聖ヨハネ学園の理念『いのちがかがやくために』を制定し『ご利用者がかがやくために』『地域と共にかがやくために』『職員がかがやくために』『職場がかがやくために』の4つの指針を掲げました。この理念こそまさしく聖ヨハネ学園の『さん』から『様』への変化を現したものと言えるでしょう。法人の呼称もこの130年で『貧院→救児院→孤児院・養護』と変化してきました。この呼称の変化と共にご利用者への対応もご利用者中心の対応へと変化したのは間違いないでしょう。

最後に聖書のことばを紹介して終わります。『私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

（マタイ25：40）

感謝状を頂戴して

聖ヨハネ学園
理　事
井上　美津

130周年法人交流会の場で、「感謝状」を頂戴致しました事、心より感謝申し上げます。

幼き頃、教区の青年達や立教大学ワークキャンプの方々へ、西瓜を聖ヨハネ学園キャンプ場に持って行った事。学園の職員達のクリスマス礼拝・祝会が高槻聖マリヤ教会(かつての高槻聖公会伝道所)2階の畳敷きの部屋で行われた事など、懐かしく思い出されます。

ミス・ブール記念ホームが開設した頃に評議員として席に座らせて頂き、その後、次々と施設や職員の数が増えるにつれ、役員としての責任も重くなって参りました。

当時の評議員の権限は大きく、ある時は教会会館2階で、ある時はY夫人宅に伺って相談する事も多々ありました。学園で行われる役員会も、時には夜中になる事もありましたが、その時には、其々が施設の事を大切に思い、真剣に議論し合ったのだと今にして思います。

「聖ヨハネ学園の理念」(長：猿橋靖氏)作成。休眠状態であった後援会を再び活動の場に戻す作業(長：竹内信義司祭)。シンボルマーク作成(牧口一二氏)などの場に関わらせて頂いたことは大きな喜びでした。

当時の定款には「評議員は、大阪聖ヨハネ教会婦人会員が担う」と明記されていて、私の結婚準備・立会人をして下さった、聖ヨハネ教会牧師の有近康男司祭に「座っているだけで良いから評議員になるように」の言葉でお引き受けしてから30数年。

「130周年のあゆみ」に書かれています役員の方々のお名前、特に大阪聖ヨハネ教会婦人会の皆さまのお顔を思い出しつつ、その時々にお教え頂いた事、お導き頂いた事が今も私の中に生きています。

今後とも、職員・ご利用者・地域・役員が、理念に書かれています「いのちがかがやくために」それぞれの場で発揮できますように努力を重ねて参りたく思っております。

創立130周年をむかえて

聖ヨハネ学園法人
事務局長　米満　司郎

私たちの聖ヨハネ学園は、大阪市内で55年間の働きの時を過ごし、高槻市宮之川原に太平洋戦争による空襲から逃れるため疎開して75年間。今年は、高槻での働き75周年であり、創立130周年の年でもあります。

今、この時を迎え、先人たちの働きに感謝するものです。

学園の成り立ちは、ミス・リーラ・ブールと大阪聖ヨハネ教会婦人会の働きによるものです。大阪聖ヨハネ教会は、学園の母なる教会でもあり、現在も教会の皆様は学園を支え続けてくださり、社会福祉法人聖ヨハネ学園後援会活動の中心をも担っておられます。

教会婦人会(女性の会)のみなさま、教会のみなさまのご支援には感謝いたしております。

法人は、現在、児童、障がい者、高齢者福祉の働きを行っておりますが、今後、30年、50年、100年後の事業を考えて、社会福祉法人聖ヨハネ学園総合整備計画の基本構想づくりに着手しております。ご利用者のみなさまの穏やかな空間として、職員のみなさまの快適な職場として、グランドデザイン(全体構想)を石田建築顧問並びに一粒社ヴォーリズ建築事務所の方々にご相談いたしております。

学園の敷地は高低差があり、聖ヨハネ学園敷地だけでも3段、ミス・ブール記念ホームと地域生活支援センター光の敷地も含めると5段の異なる地盤面を持っております。

そのため、土地利用に制約を受けることから様々な土地利用計画を建築士の方々と検討いたしております。最終報告がどのような形になるのか、近未来ですと、30年後のみなさまが活用できるグランドデザインとなることを願っております。

聖ヨハネ学園
施設長　宮脇　弘次

1889(明治22)年11月にリーラ・ブール女史が、教会婦人会の協力を得て、二人の孤児を育ててから、今年で130年になりますが、改めて130周年という長い歴史の重みを痛感しています。120周年では法人祭が開催され、その時は実行委員長をさせていただき、130周年では記念セレモニーが開催され、司会を務めさせていただきました。学園としては、10月6日(日)に学園主催の同窓会を本館ホールで開催し、約40名の卒園生、旧職員等が集まり、懐かしい顔ぶれもあり、楽しいひと時を過ごすことができました。なお、1月25日(土)には、在園児童、職員を対象としたお祝いの食事会を予定しています。

さて、先日行われた第36回の丘のまつりですが、天候にも恵まれ、地域の皆様にも多数参加していただき、賑やかな行事となりました。私自身は、平成2年に児童養護施設の児童指導員

として就職し、法人内の異動を経て、今年で30年目になりますが、私が大学4回生の時に第1回丘のまつりのボランティアとして参加させていただきました。また、同じ年の児童相談所の一時保護所での実習時に自分の人生を決める契機となった2歳の男の子との出会いがあったのですが、その男の子の入所予定が聖ヨハネ学園でした。残念ながら、その男の子は直前に入所先が変更になり、結局は聖ヨハネ学園には入所しなかったのですが、聖ヨハネ学園とは何か見えない糸でつながっているのではないかと思っています。その当時はまさか自分が聖ヨハネ学園で働くとは思ってもいませんでしたが、それから5年後にたまたま求人募集を大学に出されていたのを、大学の恩師より聞いて、面接をしていただき、幸いにも採用していただき、今日に至っています。

来年は131年目になりますが、これからも子ども達の最善の利益のため、職員一丸となり、頑張って参りますので、ご支援、ご協力宜しくお願いいたします。

下田部保育園 施設長 小池 みどり

法人130周年おめでとうございます。

130周年という年月の重みを感じながら、そして、これまで支えて下さった方々のご尽力に感謝し、継続していく私たちに、更なる力を与えて下さったと実感しています。

思い起こせば、1971年に開設された下田部保育園に、大阪という地を知らない私が門をたたいたのは1979年でした。その当時は、児童養護施設と下田部保育園の2施設でしたが、今では7施設となり発展を遂げています。これも、時があるごとに歴史を振り返り土台にして積み上げ、法人の素晴らしさを継続してきたからではないかと思います。

また、その時、その時に法人に携わった方々のおかげだと感謝しています。

2021年に創立50周年を迎える下田部保育園では、毎年保育園のテーマを決めて、取り組んでいます。法人理念が設立された2008年には「いのち輝くために」、2010年の建て替えには「ありがとう～緑あふれる保育園～」、法人130周年と令和元年の今年は「笑顔でつくろう新しい時代～かけがえのないあなたを大切に～」を基に、法人、時代を背景になつまつりや作品展には、可視化して子ども、職員、保護者と一体になり取り組んでいます。これは一例ですが、歴史があるから出来る事だと思います。

これからの時を刻んでいくにあたり、130年を感謝し社会福祉法人として地域に根差した「いのちがかがやくヨハネ学園」としての役割を担っていきたいと思います。

ミス・ブール記念ホーム 施設長 瀬古 雅子

ミス・ブール記念ホームは聖ヨハネ学園の創立90周年の記念事業として1981年の5月に竣工。創立110周年にあたる2000年から在宅サービス事業を開始し、120周年に小規模特養を開設するなど、法人の節目に沿って事業が展開されてきた経緯があります。この機会に、ミス・ブール記念ホームの創立10年の記念誌をながめていると、開設から10年を迎えるまでの経緯や苦労とともにご利用者支援に対する葛藤などが主につづられており、その内容は、時間が流れ、介護保険制度創設後にいる現代の私たちが抱えている悩みと大きく変わらないのだと気づきます。きっと、時間が流れ、やり方や考え方が変わったとしても、目の前にいる方々の幸せを考える「思い」は、30年であっても130年前であっても変わらないのではないかと思います。

「130周年」を検索すると、日本大学が今年度に、帝国ホテルが来年度に130周年を迎えるようです。ほぼ同時期から始まったそれらの事業は、それぞれの思いを「130年の輝きとともに未来を創る」「歴史にふさわしく未来にふさわしく」と掲げていました。ひとことで「130年」と言うと、時の流ればかりに目を向けてしまいますが、同じ「思い」で関わってきてくださった方々の一日一日の積み重ねが130年だと考えるとその重みを深く感じます。

その時代ごとに必要な方々へ手を差し伸べてきた法人の歴史を知った時、私がこの法人の一員であることに誇りを感じたように、これからの未来に携わることができる責任と誇りを感じながら、変わらぬ「思い」をもって今後も邁進していきたいと思います。

ゆう・あいセンター
施設長　北川　勝

法人創立130周年おめでとうございます。

私がミス・ブール記念ホームで働き始めた頃、秋晴れの青空のもと聖ヨハネ学園のグランドにテントがたくさん立てられ100周年記念式典が盛大に行われていたのをホームの窓から眺めておりました。その年には、ゆうあいセンターも高槻市から委託を受け、事業を開始しています。

そして、その30年後の2019年11月16日に、秋晴れの青空のもと、大阪聖ヨハネ教会にて法人創立130周年記念礼拝が行われました。そしてその次の日には、ゆうあいセンターでも創立30周年記念フェスタが開催されています。

私自身、聖ヨハネ学園の歴史の中で30年間以上を高齢者や障がい者の福祉にかかわらせていただくことができ、とても良い経験をさせていただいたと感謝をしております。法人内施設で働いている職員の皆様も、この130周年を記念するとともに、先輩たちが培ってきた歴史を振り返ることが出来たのではないでしょうか。そして職員の一人ひとりが、これからの『社会福祉法人聖ヨハネ学園』を考えていく、良い機会となったことと思います。

法人を支えていただいている皆様の支援に感謝し、これからの「社会福祉法人聖ヨハネ学園」を職員とともに創っていきたいと思います。

130周年おめでとうございます。

うの花療育園
施設長　平井　克典

法人創立130周年を迎えられましたことに、心からお祝いを申し上げたいと思います。

私は、平成3年から聖ヨハネ学園に入職させていただき、25年間大変お世話になりました。

思い返せば、たくさんの思い出がありますが、その中でも『つながり』に関するエピソードを一つご紹介したいと思います。1917年(大正6年)アメリカのネブラスカ州オハマに『少年の町』という更生自立支援施設を創設されたことで有名なフラナガン神父が、昭和22年に来日し、「どうか正しく素直に成長して、日本を立て直してください」とのお言葉と、朝日会館(中之島中央公会堂)において、大阪にある7つのキリスト教関係の施設(東光学園、博愛社、聖家族の家、邦寿会駒川ホーム、水上隣保館、健康の里、聖ヨハネ学園)に対し【鐘】が贈呈されました。

神父が日本を訪れた1947年(昭和22年)頃は、まだ戦争の傷跡が各地で残っており、戦災者や浮浪児が町にあふれ、戦争で親を失った子どもたちが野宿をし、冬には凍死する子ども、犯罪に手を染める子どもも数多くおり、このような子どもたちが聖ヨハネ学園をはじめ各施設に入所していました。神父が大阪に来られ、様々な施設を見学される中、子どもたちの現状に心を痛められ前述のお言葉と、金一封を残され【フラナガン神父の愛の鐘】は製作されたのです。それから時は経て、2010年(平成22年)、東光学園の職員から私宛に連絡が入り、「聖ヨハネ学園が贈呈されたフラナガン愛の鐘はありますか?」これがきっかけとなり、【愛の鐘】

探しにつながります。

まず、真っ先に赴いた法人本部には無く、創立百年の記念誌を隅々まで確認したところ、伊藤昭先生による学園のあゆみ⑥に、「滑り台の横の丘には鐘楼があって朝・昼・夕の1日3回、アンジェラスの鐘に似せて、当番が毎日鐘を鳴らしていた」の記述より、当時鳴らされていた鐘は、今は何処に?という疑問に発展し、歴代の施設長にお話しを伺う中、鐘楼は老朽化により取り壊され、ミス・ブール記念ホームの敷地に大切に移設されたのではないかとの有力な情報を得ることができ、早速鐘の写真を東光学園に送りました。結果、残念ながら【愛の鐘】ではありませんでした…。

そして、同年に大阪府社協より海外研修事業として、アメリカのボーイズタウンにおいて、支援と危機管理についてというテーマで、主にコモンセンス・ペアレンティングの手法を学ばせていただきました。このボーイズタウン(少年の町)の創設者がフラナガン神父だと研修冒頭で説明を受け、思わず【愛の鐘】のことが思い起こされた衝撃は今でも私の大切な思い出の一つとしてあります。

愛の鐘が各施設に贈呈され、まもなく72周年を迎えます。つらい思いを抱きながら、施設で生活を余儀なくされた多くの子どもたちや職員らは、この音色によって勇気づけられ、生き抜く術を教わり、社会へと立派に巣立っていかれたことと思います。そして、本法人におきましても、リーラ・ブール先生の教えを受け継ぎながら、聖ヨハネ学園すべての皆さんの幸せを願うとともに、たくさんの思い出をいただいたことに心から感謝します。どうか【愛の鐘】が見つかりますように。

地域生活支援センター光 施設長 種本 浩司

明治22年に産声をあげた聖ヨハネ学園ですが、その当時の時代背景を考えると社会福祉制度は乏しく、ミス・リーラ・ブール先生を中心に当時の職員の苦労は想像を絶するものだったと思われます。

地域生活支援センター光の前身である「聖ヨハネ養育センター」は昭和51年に開設しました。当時は障がい分野における短期入所は未整備でした。障がいのある方を介護されているご家族は、冠婚葬祭への参加もままならず、病気や怪我での入院もできず踏ん張っていたのが実情でした。

そのような中、誕生した短期入所施設ですから、開設当初の職員は何もかもが手探りで大変だったことでしょう。しかし、そうしたパイオニア的な働きは130年前に先輩方が歩まれた道があったからだと思います。

その後聖ヨハネ養育センターは発展改組し、「地域生活支援センター光」として生まれ変わりました。

脳性麻痺を中心とした重度の身体障がい者の貴重な入所施設としてご利用者やご家族からの大きな期待を背負っての開設でした。開設当時の混乱期を何とか乗り越えて、いのちがかがやくための支援を続けてまいりました。ところが、少子高齢化による人口減少の影響から、光は現在空前の人材不足に悩まされています。

しかし、私たちは先輩方の歩みを通じて、人が人を支援するこの仕事の尊さを知っています。先輩方に負けないよう、この苦悩の時代を必ず乗り越えて、ヨハネ学園のこれからの歴史に私たちも尊い歩みを重ねていきます。

聖ヨハネ子どもセンター 施設長 上田 有美

法人創立130周年を迎えられましたこと、法人職員としてこの時を過ごせたことに大変感謝致します。様々な記念行事に参加させていただき、法人の記念ビデオや法人の年表を拝見する中で、130年という長い年月の重みを改めて感じました。リーラ・ブール女史の遺志を受け継ぐ者として法人の歴史の一端を担っていること、又、ご利用者を支援する精神性が今日も受け継がれ、職員の日々の働きがあるということの意味を実感する次第です。

2人の女児を養育されたことから始まった法人の営みの中で、一番新しい施設として聖ヨハネ子どもセンターは平成23年度末に開設、平成24年度より現在の児童発達支援、放課後等デイサービス事業、障がい児相談支援を開始致しました。その前身ともいえる高槻市乳幼児療育事業

めばえ教室は平成9年度に高槻市より受託し、児童福祉法改正後、平成25年度より聖ヨハネ子どもセンターに統合されました。

人は人との間(あいだ)で生き、人が人を支え、人との関わりによって喜びや幸せを感じたり、悲しみや傷つきが起こりますが、それを和らげることができるのも人です。人との関わりの中で生じる情動は人を動かす原動でもあり、人は気持ちを理解してもらう体験があるから前に進むことができます。子どもの発達において、家族の関わりは非常に重要で、関わりのあり方が子どもの成長に大きく左右すると言われています。相互に響き合う親子に対し、保護者の子どもの発達を心配するお気持ちを受け止め、お子さまの伸びようとするエネルギーを応援する関わりについて一緒に考えていくことは、子どもの成長に繋がる大切な作業です。

子どもセンターはまだまだ歴史が浅いですが、今後も保護者とお子様の気持ちが歯車のようにうまく折り重なって協働できるよう、包括的な視点に立ち、質や量を拡げながら丁寧な支援を紡いでいきたいと思います。

法人創立130周年 記念公開講座

2019年10月26日(土)午後3時より、高槻市立子育て総合支援センター2階研修室にて、法人創立130周年記念公開講座が開催されました。

今回はおひさまにこにこクリニック(小児科・児童精神科・小児神経科)院長山口仁先生をお招きして、「何が違う?発達凸凹を持つ子の子育て～上手な個性の伸ばし方(学童期を中心に)～」についてご講演いただきました。

講演会には市民の方や法人職員など全体で71名(お子様同伴18名)が参加されました。

講演の中で先生はまず、発達凸凹のある無しに関わらず、基本的な子育てについて話されました。親として子どもをどのように理解し、どのように向き合うべきか、親自身の問題についてもお話しされました。子どもの心を見ること、ダメなことは「ダメ」だと毅然と教えること(理由は必要ない)、不快な感情を抱いている子どもにはその苦しむ過程に寄り添い待ってあげることが大切である。要するに親はドーンと構えていればいいとのことでした。発達凸凹のある子の子育てには、ちょっとした時間や工夫やコツが必要ですが、基本的な子育ては同じ。又、育て方により子どもが社会に適応していけるかどうかは変わるとのことでした。

参加者は山口先生のお話を熱心に聴かれ、会場からは多くの質問をいただきました。又、講演会後のアンケートには講演の内容について『子育てに関してのヒントがたくさんあり、非常に参考になった』『これからの子育てに活かしていきたい』という回答をたくさんいただく等、多くの方にとって学びの多い会となりました。

◎チャプレン室からの たより

「道を伝えて己を伝えず」ヨハネ学園創立130周年を記念して

～ミス・ブールの使命（ミッション）の源流に学ぶ～

チャプレン　司祭　ジョージ林　正樹

聖ヨハネ学園創立130周年おめでとうございます。学園創立の原点について、10月24日（水）に京都で開催された『日本聖公会社会福祉連盟・第60回大会・研修会』で、西口忠氏（桃山学院史料室・特別研究員、日本聖公会大阪教区歴史編集委員会・協力委員）から日本聖公会初代主教・C.M.ウイリアムズ師父の働きに多くの日本聖公会社会福祉事業の源流を学びました。

とりわけこの講演で最も記憶に残ったことは、130年前に大阪の地でミス・ブール先生が、イエス・キリストの教えに従い、神様の手足となって、神様のなさろうとする愛の業を第一に社会福祉活動（奉仕の業）をしていた原点が、ウイリアムズ主教から与えられたミッション（使命）であった点でした。

ブール先生は日本伝道を志願しますが、当時は年齢や健康状況のため反対されました。しかし京都を中心に宣教活動をしていたアメリカ人聖公会宣教師・マキム師父の要請があり来日が実現。ウイリアムズ主教と共に大阪の地で働き、聖約翰（ヨハネ）教会婦人会、聖約翰（ヨハネ）学園の母体を設立しました。その「清貧」の生き様は老監督ウイリアムズ主教の姿を彷彿させ、「女の老監督さん」と呼ばれていました。

大阪聖ヨハネ教会外観

大阪聖ヨハネ教会ゆかりの柳原貞次郎主教が残された『日本の聖なる友・ブール先生』の中で「聖徒らしい生活」の4つの特徴として、①清貧「逝去されたとき、わずかな現金と銀行預金、粗末な家具、衣服のみが遺品であった」、②自由「いかなる困難があっても英断・実行した強い意志」、③清潔「周りの者の心を清くした風貌」、④慈愛「常に愛する人々の霊魂（たましい）の幸福を第一義にした愛」を挙げておられます。

130年前に大阪の土地に蒔いた種が、園児・卒業生や高齢の入居者・利用者の感謝の言葉になって、成長を続けているのだと思います。

私はウイリアムス神学館在学中に3回訪れた若王子山墓地のウイリアムズ主教の墓碑に刻まれた「道を伝えて己を伝えず」を鮮明に想起しました。

ミス　リーラ・ブール肖像

社会福祉法人 **聖ヨハネ学園**（法人本部）
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号　TEL＆FAX 072-687-0548

- **聖ヨハネ学園**（児童養護施設）
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号　☎ 072-687-0541　FAX 072-689-3623
- **下田部保育園**（保育所）
〒569-0046 高槻市登町1番1号　☎ 072-671-9960　FAX 072-673-8039
- **ミス・ブール記念ホーム**（特別養護老人ホーム／デイサービスセンター／ケアプランセンター／ヘルパーステーション／地域包括支援センター／エンゼル園）
〒569-1031 高槻市松が丘1丁目21番9号　☎ 072-688-5138　FAX 072-688-4478
- **ゆう・あいセンター**（高槻市事業受託／地域活動支援事業Ⅱ型・特定指定相談支援事業）
〒569-0075 高槻市城内町1番11号　☎ 072-672-0267　FAX 072-661-3508
- **うの花療育園**（高槻市指定管理者事業・児童発達支援センター）
〒569-1131 高槻市郡家本町5番5号　☎ 072-685-3803　FAX 072-685-3805
- **地域生活支援センター光**（障がい者支援施設／放課後等デイサービス）
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号　☎ 072-680-1110　FAX 072-691-8300
- **聖ヨハネ子どもセンター**（高槻市乳幼児療育事業受託／児童発達支援／放課後等デイサービス事業／障がい児相談支援事業）
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号　☎ 072-687-7720　FAX 072-687-7722